



馬は人のために走る

Horses Run for People: What Monty Roberts Taught Us
モンティ・ロバーツが教えてくれたこと

「よい調教師には、馬の話が聞こえる。
偉大な調教師には、馬のささやきが聞こえる」
馬と話す男、モンティ・ロバーツの座右の銘である。
馬たちは何を語りかけているのだろうか。
耳を澄ませば、きっと聞こえる。

治郎丸敬之 = 文
text by Takayuki Jiroamaru
太田宏昭 = 写真
photograph by Hiroaki Ota
武藤きすい = イラスト
illustrations by Kisui Muto

人は馬と話す

ことができる。そんなことを書くと、
またありもしない妄想をと思われるか
もしれないが、本当のことだ。バーナード・マラマッドの短編「喋る
馬」のように、馬が人間の言葉を喋るわけではない。そうではなく、馬
が全身から発するボディラングエッジを人間が理解することによって、
または理解しようとすることによって、私たちは馬と話することができる。
お互いに心を通わせ、信頼関係を築くことができるのだ。

馬と話することについて、モンティ・ロバーツという男の存在を抜きに
しては語れないだろう。世界的調教師にして、人が馬と話すことができ
ることを示してくれたホースマンである。私がモンティ・ロバーツのこ
とを知ったのは、競馬を始めておよそ八年が経ち、もつと競馬について
知りたいと思い、あらゆるホースマンたちの著した書物を読み漁ってい
たある日のことである。

いつものように書店の競馬本コーナーの前に立つと、『馬と話す男』
（モンティ・ロバーツ著、徳間書店）という本のタイトルが目が留まり、私はし
ばし釘付けになった。当時のチャンピオンジョッキーであった岡部幸雄
騎手が提唱していた「馬、優先主義」が、私たちの競馬ファンの間にも少
しずつ浸透していた時代ではあったが、それにしても馬と話すとは……。
胡散臭そうだと思いつつ、もしかして馬と話せるようになれば馬券も当
たるかも知れないという下心を隠しながら、私はその本を手にとった。
一気に読み終えた私は、これまでの人と馬との関係がいかに間違っ
ていて、モンティ・ロバーツのそれに対する考え方が正しいかを思い知ら
された。人間と馬とのバランスの取れた友好的な関係、モンティ・ロバ
ーツはこれを「同志の契り」と呼んだ。「この世界が、馬にとって、も
っと生きやすい場所になること」という世界観に私は酔いしれた。
ダメ押しをするように、来日して競馬関係者の前で実際に馬を馴致す
るモンティ・ロバーツの姿を、私はグリーンチャンネルで観た。そこに

は馬と人との新しい関係が映し出されていた。モンティ・ロバーツは、
馬を威嚇することなく、痛めつけることもなく、あつという間に馬を手
なずけてしまった。マジックでもトリックでもない、馬と人の対話がそ
こにはあったのだ。

一九三五年、モンティ・ロバーツはカリフォルニア州に生を受け、幼
い頃からロデオ競技場で馬と共に過ごしてきた。二歳になる頃には、ひ
とりで馬に乗り、一日の大半を馬上で過ごすようになった。そして、た
った四歳にして、馬術競技会のジュニア部門で優勝したという。馬の上
で人生が始まったということだ。彼にとって、馬は家族同然のパートナ
ーであった。

そんなモンティ・ロバーツにとって、どうしても耐えられないこと
がひとつだけあった。父が行う伝統的な馬の仕込み方である。馬がそ
の背に鞍を着け、人間を乗せることができるようになるまでの訓練を
「馴致」（ブレイキング）というが、モンティ・ロバーツの父だけではなく、
あらゆるホースマンによって、馬にとって極めて残酷な馴致（ブレイキン
グ）が行われていた時代がある。

まず最初に、父は馬たちに面がい装着する。そのうえで、お
互いの体が触れ合うぐらいの群れにして、馬場を走らせる。次は
面がい頑丈なロープを結びつけ、一頭ずつ列々の柱につなぐ。
柱の地上約百八十センチのところからロープの端を巻き付け、横木
に渡して、しっかりと結わえる。このようにして、六頭の馬を、
馬場の柵にそって十メートルぐらいの間隔で並べる。馬たちは、
このときすでに恐怖を感じている。
父は、馬場の中央に立って、厚い防水布製の袋、もしくは重し

馬は人のために走る
モンティ・ロバーツが教えてくれたこと